

廣池千九郎、実験心理学を学ぶ

——元良勇次郎、松本亦太郎に連なる心理学者たちとの交流——

立木 教夫

目次

- 一 はじめに
- 二 廣池千九郎、実験心理学を学ぶ
- 三 元良勇次郎と日本の心理学
- 四 ウント、ホール、元良とつながる実験心理学の系譜
- 五 蠣瀬彦蔵との交流
- 六 廣池の心理学研究
- 七 元良没後の日本の心理学の展開
- 八 むすび

一 はじめに

廣池千九郎博士は、『道徳科学の論文』〔昭和三年二月二五日、初版発行〕（以下『論文』と略す）を執筆したとき、一九二〇年代に最先端であったさまざまな学問を援用して、道徳科

学の基礎付けを試みた。その内容は、『論文』の第二章から第十一章に互って展開されている。そこで必要とした諸科学は、

「地質学 (geology) ・地文学 (physical geography) ・生物学 (biology) ・進化論 (the theory of evolution) ・発生学 (genetics) 〳〵の中に遺伝説を含むく・環境改良学 (euthenics) ・人種改良学 (eugenics) ・土俗学 (ethnography) ・生理学 (physiology) ・人類学 (anthropology) ・人種学 (ethnology) ・人種起原学 (ethnogeny) ・考古学 (archaeology) ・法理学 (jurisprudence) ・骨相学 (phrenology) ・心理学 (psychology) ・社会学 (sociology) ・犯罪学 (criminology) ・文明史 (history of civilization) ・法制史 (history of system of law) ・経済史

(history of political economy)・道徳史 (history of morality) へ以上諸科学の分派に比較土俗学 (comparative ethnography)・犯罪人類学 (criminal anthropology)・犯罪社会学 (criminal sociology)・犯罪心理学 (criminal psychology)・動物心理学 (animal psychology)・社会心理学 (social psychology)・民族心理学 (folk psychology) をはじめとして、なおこのほかにたくやんあれど、みなこの中に包括されておりますく等⁽¹⁾」

であった。ここに挙げられた学名のうち、「発生学 (genetics) への中に遺伝説を含む」という部分の genetics は、現在では「遺伝学」となり、「発生学」は embryology の訳語として通行している。また、「人種改良学 (eugenics)」は「優生学」、「土俗学 (ethnography)」は「民族誌学」、「人種学 (ethnology)」は「民族学」等々と、変化していることを指摘しておかなければならない。

本稿では、ここに「心理学 (psychology)」に注目する。

『論文』の第四章は、実験心理学を中心として構成されているが、廣池は、いかなる素養をもって、実験心理学を取り上げたのであろうか。

二 廣池千九郎、実験心理学を学ぶ

廣池は、明治二六年「二七歳」頃、法律学を専門として学者の道を歩み始め、後に穂積陳重博士に師事することとなった。あるとき、穂積は、法律学にとって自然科学がいかに重要であるかを話した。それを聴いていた廣池はその指摘を真剣に受け止め、東京帝国大学の自然科学系の研究室に入って手ほどきを受けたという。元良の実験心理学の研究室もその中に含まれていた。

「時に「穂積陳重」先生の申さるるには今後法律学を科学的に造り上ぐるには、自然科学の力に待たねば為らぬ事が多いとの事でありました。其当時の日本の法学者は一人もかかる事に耳を傾くる者はなかつたが、私はそうじやと思ひ、それから先づ東大理科大学の研究室に入つて研究を始めました。主に其時に御世話になつたのは坪井正五郎と云ふ先生でありました。それから心理学、これは其当時大変なもので実験心理学と云ふものが輸入された直後の事でした。これは元良^{モトラ}勇次郎^{ユウジロウ}先生と云ふ先生に就いて御指導を受けたのであります。それから医科・工科・農科・あらゆる帝大の各方面の研究室を巡回して其研究室で色々な御指導を受けて自然科学の方も一通りの事が解るやうになつ

たのであります。⁽³⁾」

廣池は後に、『道徳科学の論文』を執筆することになるが、このような学問的基礎訓練を得ていたことは非常に重要であった。本稿では、廣池が元良の指導を受けた時期を確定し、元良を中心とする心理学者たちとどのような交流があったのかを探ってみたいと考えている。

では、時期の確定についてであるが、引用文中から手がかりとなる箇所を抽出してみよう。

- (1) 「穂積陳重」先生の申さるるには……」
- (2) 「其時に御世話になつたのは坪井正五郎と云ふ先生でありました」
- (3) 「実験心理学と云ふものが輸入された直後の事」
- (4) 「元良^{モトラ}勇次郎^{スジ}先生と云ふ先生に就いて御指導を受けた」
- (5) 「医科・工科・農科・あらゆる帝大の各方面の研究室を巡回し「た」」

順に時期を確定していくことにしよう。

(1) この引用文に先立つ部分で、すでに「私は此の先生の門に入つて内弟子として先生から法律学の御指導を受けたのであります」という記述があることから、この話を聞いたのは廣池が穂積に師事した後のことであると判断できる。では、廣池はいつ穂積に師事したのであろうか。これについては、期日を明

記した資料が発見されていないが、廣池千九郎研究室では明治三六（一九〇三）年頃と推定しているので、それに依ることにしたい。

(2) 坪井が東大理科大学にいた時期を調べる必要がある。坪井は、明治二五年以後、大正二年まで、東大教授を務めた。留学等で不在にした時期は、明治二二年から二五年まで、ロンドンに留学したことと、大正二年にロシアに行ったときである。⁽⁴⁾

廣池の遺稿の中に、「坪井紹介」という言葉が、明治三七年「二月下旬日曜」の予定として記されている。この記述の「坪井」が誰であるかは不明である。坪井という名であれば、明治三九年一月一三日と日付が明記された、歴史学者の坪井九馬三からの封書が残されており、坪井九馬三の可能性もあるが、坪井正五郎の可能性もゼロではない。明治三六年に穂積に師事し、「今後法律学を科学的に造り上ぐるには、自然科学の力に待たねば為らぬ事が多い」という話を聞き、坪井正五郎に会うことにしたのだとすれば、時期的には十分可能と思われるからである。

(3)と(4)の元良に関しては、項を改めて詳しく扱うことになる。

(5)について。明治一〇年に創立された東京大学は、明治一九年三月二日に「帝国大学令」が公布され、帝国大学と改称された。帝国大学は大学院と分科大学の二つの部分をもって構成さ

れることとなった。分科大学は、法科大学、医科大学、工科大学、文科大学、理科大学の五つからなり、「各分科大学の学科を定めて、法科大学を法律学第一科・法律学第二科・政治学科・行政学科・財政学科・外交学科に、医科大学を医学科・薬学科に、工科大学を土木工学科・機械工学科・造船学科・電気工学科・造家学科・応用化学科・採鉱冶（や）金学科に、文科大学を哲学科・和文学科・漢文学科・博言学科に、理科大学を数学科・星学科・物理学科・化学科・植物学動物学科・地質学科に分けた。「中略」各分科大学の修業年限は医科大学の医学科を四年、その他をすべて三年とし、大学院の攻究期間を二年以内と定めた。分科大学にはなお選科生を置き、課程中の一課もしくは数課を選び専修する制度も設けた。「明治」二十三年六月に、東京農林学校を改造して帝国大学の一分科として農科大学を設け、農学科・林学科・獣医学科を置き、修業年限を三年とした。これによって、帝国大学は六分科大学制となった⁵⁾のである。

廣池が述べたように、「医科・工科・農科・あらゆる帝大の各方面の研究室を巡回して其研究室で色々な御指導を受ける」「た」ということは、明治二三年以降であれば可能であることがわかる。

さて、次に、(3)(4)の事項について、元良の経歴と併せて、詳しく見ていくことにしよう。

三 元良勇次郎と日本の心理学

元良勇次郎は、「明治時代における唯一最高の実験心理学開拓者である」という評価が与えられている。元良の経歴をたどり、日本の明治期の心理学の発展を概観しつつ、廣池との接点を探っていくことにしよう。⁷⁾

一八五八（安政五）年、杉田勇次郎誕生。父杉田泰は撰州^{ゆたか}三田藩士で藩校・造士館の教授を務めた儒学者であった。勇次郎は、後に元良家の養子となる。

一八六九（明治二）年「一二歳」、三田で、江戸幕府蕃書調所教授筆頭の職にあった川本幸民が、一時、故郷に戻って開いた英蘭塾で英語と数学を学んだ。

一八七二（明治五）年「一五歳」、父が病没。

一八七三（明治六）年「一六歳」、勇次郎は三田に招かれていた神戸の宣教師デイヴィスに出会い、説教を聞いた。

一八七四（明治七）年「一七歳」、キリスト教の洗礼を受けた。

一八七五（明治八）年「一八歳」、「勇次郎は神戸のデイヴィスの家の住み込み、ボーイとして働きながら英語と聖書を学ぶようにな⁸⁾った」。デイヴィスが京都の同志社に移ると、勇次

郎も京都に同行して同志社英学校に入学し、第一回生となった。「同志社は伝道師を養成するを目的とせしも、彼は数学及び物理学に秀で、又カーペンターの『精神生理学』を愛読し、心理学の研究を志す。⁽⁹⁾」

一八七七（明治一〇）年、東京大学創立⁽¹⁰⁾。

一八七九（明治一二）年「二三歳」、勇次郎は同志社英学校を中途退学し、上京して、津田仙の東京・学農社で教鞭をとった。同年九月より東京大学理学部（数学）の選科生となるが、翌年一月に退校した。この年、ドイツでは、ヴントがライプツィヒ大学に心理学実験室を設立している。

一八八〇（明治一三）年「二三歳」、勇次郎は東京英学校（後の青山学院）の数学教員となった。

一八八一（明治一四）年「二四歳」、津田仙の紹介により元良米と結婚。元良家の養子となる。

一八八三（明治一六）年「二六歳」、元良勇次郎はボストン大学に留学した（一八八五）。

一八八五（明治一八）年「二八歳」、元良はジョンズ・ホプキンス大学に正規学生として入学した。この時の日本人留学生仲間には、太田稲造「新渡戸稲造⁽¹¹⁾」、佐藤昌介「後に、北海道帝国大学初代総長」、長瀬鳳輔「後に、陸軍大学教授、東亜同文書院校長、参謀本部、国士館中学校長」、家長豊吉「法学者」、渡瀬庄三郎「後に、東京帝国大学動物学教室、第五代教

授、日本哺乳類学会初代会頭」がいた。

一八八六（明治一九）年、東京大学、帝国大学と改称された。⁽¹²⁾

一八八七（明治二〇）年「三〇歳」、元良は、G・S・ホール（Granville Stanley Hall）が創刊した『アメリカ心理学雑誌』にホールと連名で「圧の漸次変化に対する皮膚の感受性」[Dermal Sensitiveness to Gradual Pressure Changes]を執筆した。これは日本人初の心理学専門論文である。

一八八八（明治二一）年「三二歳」、元良はジョンズ・ホプキンス大学で博士号を取得した。帰国直後に、東京英和学校で教授兼校主として教鞭をとったが、二ヵ月後の九月からは、講師を嘱託され、帝国大学文科哲学科で「精神物理学」を講義した。⁽¹³⁾

一八八九（明治二二）年「三三歳」、宣教師と合わず東京英和学校を辞任。⁽¹⁴⁾

一八九〇（明治二三）年「三三歳」、一〇月七日、元良は、帝国大学文科大学教授に就任した。

一八九二（明治二四）年、アメリカ心理学会（APA）が設立されている。

一八九三（明治二六）年「三六歳」、元良は「心理学・倫理学・論理学」第一講座担当となった。初の心理学担当教授である。

一八九四（明治二七）年、日清戦争（一八九五）。

一九〇一（明治三四）年「四四歳」、元良が自宅でおこなってきた研究会を、帝国大学文科心理学教室での「心理学会」として再組織化した。⁽¹⁵⁾

一九〇二（明治三五）年「四五歳」、この年、蠣瀬彦蔵が心理学教室の助手となる（一九〇二年九月―一九〇六年九月）。

一九〇三（明治三六）年「四六歳」、東京帝大に精神物理学実験室（心理学実験場）開設。「文部省の建築、会計両課長から山川「健次郎」総長に引き渡されたのは同年四月二三日であった。⁽¹⁶⁾

「明治三三（一九〇〇）年まで欧米に留学した松本「亦太郎」は、イェールのほか、ハーバード、コロンビア、クラーク、ケンブリッジ、ライプチヒ、ベルリン、ゲッチンゲン、ヴェルツブルク、チューリヒ等の大学の心理学教室の実験室、実験機械、実験状況を詳細に報告し、また、元良「勇次郎」の依頼によって実験機器の購入や文科大学の心理学実験室の設計まで行ったが、帰国後直ちに講師を委嘱されて、「実験心理学」を担当した。さらに翌三四年の秋から実験演習も担当することになった。この時には、一三種類の実験しか用意できなかったが、心理学の実験法を一通り習熟するには三〇種類の実験が必要であると述べている（松本、一九一三）⁽¹⁷⁾。

一九〇三年に精神物理学実験室が完成した時、実験演習とし

て取り上げられたもののリストは、次のようであった。「精神作用の時間に関しては、色彩、音響及び言語に対する認識、弁別、選択及同伴作用の時間、及時間経過の判断等に関する実験あり。心身の動作に関しては、自律的及他律的動作、書記運動、腕の廻転運動、指頭の反復運動、力の主観的計量等に関する実験あり。空間知覚に関しては視覚的錯誤、色視野の広狭、両眼諦視点合同の範囲及触定間、聴定間等に関する実験あり。覚閾に関しては、触の覚閾、最高聴音、両耳の聴差等に関する実験あり。感覚の質に就ては色彩方程式に関する実験あり。数の練習には二乗錯差及平均錯差等の計量及数のテーブルの用法等あり……」⁽¹⁸⁾

一九〇四（明治三七）年「四七歳」、東京帝大文科大学において心理学専修が成立した。この年、日露戦争（一九〇四年二月―日―一九〇五年）が始まった。元良は、第五回国際心理学会参加と欧米各国視察の目的で出張した（一九〇四年九月―六日―一九〇五年一〇月二一日）。

ドイツ実験心理学会（後にドイツ心理学会）が設立された。

一九〇五（明治三八）年「四八歳」、第五回国際心理学会で、元良は「東洋哲学における自我の観念」を発表した。

一九一二（大正元）年「五五歳」、二月二三日、元良死去。同日、叙従三位叙勲二等授瑞宝章を贈られた。

以上、元良勇次郎の経歴を中心に明治期の日本の心理学の展開をたどってきたが、ここで廣池が実験心理学を学んだ時期の確定に、話を戻すことにしよう。

(3)の「実験心理学と云ふものが輸入された直後の事」という記述であるが、もし、「実験心理学」と「精神物理学」と同じものであると捉えるなら、元良が帰国し、帝国大学で「精神物理学」を講義しはじめた明治二年九月の直後ということになる。この時期、廣池は、中津にいて、七月に「高等小学校教員免許試験に合格」し、一〇月に中津高等小学校訓導を任せられたところである。これは時期的に早すぎる。よって、「実験心理学と云ふものが輸入された直後」を、明治三年、つまり、松本亦太郎が欧米留学を終えて帰国し、東京帝国大学で「実験心理学」を担当し始めた年の直後と捉えることにしたい。

(4)「元良勇次郎先生と云ふ先生に就いて御指導を受けた」ということから、元良が東大にいた時期を調べる必要がある。

元良が講師として帝国大学文科哲学科で「精神物理学」を講義したのが明治二年、帝国大学文科大学教授に就任したのが明治二三年、第一講座担当の心理学担当教授となったのが明治二六年、東京帝大に精神物理学実験室（心理学実験場）開設されたのが明治三六年、東京帝大文科大学において心理学専修が成立したのが明治三七年である。

(1)から(4)の時期を重ね合わせてすべての条件が満たされるの

は、明治三六年以降ということになる。

元良から指導を受けたのが明治三六（一九〇三）年頃ということであれば、廣池は三七歳である。この年に東京帝国大学に開設された精神物理学実験室（心理学実験場）で、実験心理学の手ほどきを受けたのかもしれない。元良は、明治三七年の九月一七日から約一年間、海外出張に出かけているので、「指導を受けた」可能性があるのは、明治三六年から三七年九月までの範囲と考えられる。

四 ヴント、ホール、元良とつながる実験心理学の系譜

元良が留学から帰国したときに日本にもたらした心理学は「精神物理学」というものであり、ヴントやホールの流れに連なる新しい心理学であった。

ドイツの実験心理学の創始者のヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920) は、生理学の訓練を受けており、彼の心理学は、「経験と実験とは共通領域を有する。実験装置を媒介して内省を客観化して意識内容としての精神を記述することができるという立場に立つ¹⁹⁾」ものであった。日本の心理学者、野上俊夫がヴントにはじめて面会したとき、ヴントは、元良勇次郎を亡くして惜しいことをしたと述べたという⁽²⁰⁾。

アメリカの心理学者のホール (Granville Stanley Hall, 1844

1924) は、ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) のもとで博士号 (PhD) を取得した後、ドイツ留学中にライプツィヒ大学のウントのもとに赴き、一八七八〜八〇年の間滞在した。彼はウントのアメリカ人の最初の弟子といわれるが、「後の心理学を展開する際にウントの学説がどれくらい影響したのか、ということについては議論の余地はある」と言われている。「しかし、ホールはアメリカでの心理学が神学の影響下にあったのに比べてドイツの心理学が非常に自由で闊達であることに感銘を覚え (Hall, 1912)、それを母国でも実現すべくドイツからの帰国後にジョンズ・ホプキンス大学に心理学実験室を設立したのである (一八八三)⁽²¹⁾」。

元良は、ドイツ留学を終えて生理学的心理学と実験室の建設に努めていたホールのもとに留学した。「人種差別による反対を押し切って、大学が彼を年俸五〇〇ドルの特別研究生 (Low by courtesy) にした後は、友人達の話では、実験室における Hall 教授との対応ぶりは元良があたかも助教授であるかのようにであったという (長瀬, 1913)、これは助教授なみの文献学的実力と理工学的技能が研究室の雰囲気なかで社会的承認を得ていたためであろう⁽²²⁾」。

元良はホールと共同研究を行い、連名論文を発表している。廣池は『論文』にウントもホールも共に引用している。

五 蠣瀬彦蔵との交流

蠣瀬彦蔵かきせひこぞう (一八七四「明治七」〜一九四四「昭和一九」) は、明治七年九月、大分県に生まれ、明治三四年東京帝国大学卒業後、同大学院を経て、明治三九年にアメリカに留学し、ドクター・オヴ・フィロソフィーの学位を受けた。帰朝後東京高等師範学校講師、文部省図書監修官を務めた⁽²³⁾。

蠣瀬は元良の教えを受けた学生で、第三代目の助手 (明治三五「一九〇二」年から同三九「一九〇六」年) を務めた。廣池が元良の指導を受けたのが明治三六年頃とするなら、蠣瀬はそのとき元良の助手をしていたことになる。蠣瀬は明治三八 (一九〇五) 年に米國クラーク大学の総長となったホールのもとに留学した。明治四〇年二月二九日に、廣池のもとに、蠣瀬から「絵はがき」が送られ、留学三年目から助手に任命され、経済的な心配がなくなったことが伝えられている。

「Mr. Chikuro Hiroike,

32, Daimachi, Hongo Ku, Tokio, Japan.

平素御無音申上候。昨今、益々御清康奉賀候。小生義、無事消光罷在候間、御安心被下度候。小生義モ、当秋ヨリ当大学心理学助手任命、為メニ衣食ノ憂無ク勉学出来得ル事卜相成候段、何卒御放念被下度候。末筆乍、奥様に宜

敷、又、金水館ニ御出之序ハ、同家ニ宜敷御伝言被下度候。／＼不⁽²⁴⁾／＼蠣瀬彦蔵

発信地は、アメリカ、マサチューセッツ州のウスター(Worcester)で、クラーク大学の所在地である。文面にある「何卒御放念被下度候」「奥様に宜敷」といった言葉から、廣池は、同郷の八歳年下の蠣瀬が東京に出てきたので、親しく家族ぐるみで世話をしたのではないだろうか。明治時代の年不明の手紙で、蠣瀬から廣池に送られたものには、「拝復／御書永らく拝借有難御礼申上候。先頃より明き申候間早速御返可申上の処、今ニ延引却て御手数を煩し恐縮の至りに候。若し再び入用の事有之候節ハ何卒宜敷願上候」とあり、本を借してもらったこと、そして、また必要になったら貸してくださいといっていること、さらに、「拝復」とあるから、おそらく返却を促されたのであろうと思われる。このようなことから、廣池が蠣瀬の世話をしていた様子が垣間見られるように思われる。

明治四四年三月一七日には、廣池に帰国を知らせる手紙(封書)が送られている。蠣瀬は、明治三八(一九〇五)年から四年一二月まで五年間、米国に留学し、有益であったと述べているが、それは学位取得という大きな成果をもたらすものであったからであろう。

「伊勢大神宮付属／皇典講究所／廣池千九郎様

大分県下毛郡大江村五八／三月十七日／蠣瀬彦蔵

拜啓 爾来御無音申上候処益々御清適奉賀候。扱テ、小生義昨年十二月、米国出立帰国ノ途に就キ、英独仏等ノ首都ヲ通過見物ノ上、露国サイベリヤ鉄道ニテ、去月末、無事帰国仕り候間、何卒御安意被下度候。／今回ノ洋行ハ頗ル益スル所有之、且ツ万端好都合に相運ビ自ラ喜悅罷り在り候。／顧ルニ、小生該挙ヲ企起ノ当初、御贊助御斡旋被下候シ為メ此ノ果ヲ得シ事ト感謝罷り在り候。月末ニハ東上、将来ノ方針ニ就キ、東京諸先輩ニ諮問可仕心算ニ有之候。其節ハ御留守宅御訪問仕り度候間、右、番地御一報被下度願上候。先ハ不取敢御一報迄。余ハ後日不遠拜肩ノ上ニ譲り候。早々不尽

三月十七日／蠣瀬彦蔵／廣池千九郎様／侍史⁽²⁶⁾

この手紙にある、「顧ルニ、小生該挙ヲ企起ノ当初、御贊助御斡旋被下候シ為メ此ノ果ヲ得シ事ト感謝罷り在り候」という文章から、蠣瀬の留学に対し、廣池が「贊助斡旋」をしていたこと、また、蠣瀬はそのことよって、「此ノ果ヲ得シ事」を感謝していることがわかる。前の手紙の「何卒御放念被下度候」ということと合わせてみると、蠣瀬が助手となって生活が安定するまでの二年間、廣池は何らかの援助をしていたのであ

ろうか。

廣池と蠣瀬の交流は帰国後も続いている。大正三年一月二五日の廣池宛の「封書」は、蠣瀬の留学先での経験的事実に対する質問に答えたものである。⁽²⁷⁾さらに、『廣池千九郎日記』（以下『日記』と略す）にも記事があり、蠣瀬は、大正一〇（一九二一）年一月四日、廣池の長男千英の結婚式に招待されている⁽²⁸⁾し、また、大正一三（一九二四）年七月二日と四日にも名前が記されている。⁽²⁹⁾

先の大正三年の封書にある、蠣瀬の住所は、「東京都牛込^市楽町二ノ二十」である。この時期、廣池は「本郷区駒込西片町十番地トノ八号」に住んでいたが、その後三回引越しをして、大正一一年三月頃からは、「東京市牛込神楽町二丁目二十番地」と、蠣瀬と同じ番地に移っている。廣池の次女富は、「お向かいの蠣瀬さん（広瀬淡窓の甥、文部省役人）」と述べている。

六 廣池の心理学研究

廣池は「心理学会」の例会に出席し、発表も行っている。心理学会は、元良が会長を務め、明治三四年二月に創立され、大正元年二月まで、一一七回の「例会」を行った。廣池は、明治三八（一九〇五）年六月一七日に「心理学会第四二回例会」において、「支那文学に於ける心理的概念」と題して報告し、

『哲学雑誌』第二二一号にそのときの報告の全文が掲載された。この発表以前にも、廣池は心理学会の例会に参加している。

『哲学雑誌』の記事を探ってみることにしよう。

明治三八年一月発行の『哲学雑誌』第二二五号の「心理学会例会記事」には、

「○心理学会／○「明治三十七年」十二月十七日の同例会に於て加藤学士の「信仰（宗教的）とは如何なる者か」に就ての講演あり……信仰の心理的過程、及信仰の意識に内存する實在の觀念の起原等に就て質疑談論あり九時開会
松本、加藤、廣池、前田、菊池、福来、紀平、蠣瀬の諸氏出席」

とある。この『哲学雑誌』は、井上円了の哲学会の機関誌『哲学会雑誌』（二八八七発行）が改名されたもので、元良勇次郎が「心理学と社会学の關係」（明治二二「一八八九」年）や「精神物理学（連載）」（一八八九年）を掲載したりして、心理学の最新動向について伝えていた。⁽³¹⁾

ここに記された人名に触れておこう。⁽³²⁾

松本は松本亦太郎、加藤は加藤玄智、前田は前田不二三、菊池は不明、福来は福来友吉、紀平は紀平正美^{（きへいただよし）}である。

松本亦太郎はこのとき、三九歳であった。心理学会での発表

は、「仮名及羅馬字の得失に就いて」（明治三十七年一月）がある。

加藤玄智（明治六「一八七三」年～昭和四〇「一九六五」年）は、宗教学者。母校東京帝国大学の助教授となり、後に國學院大學教授、大正大学教授などを歴任し、宗教学、神道学を講義した。このとき三二歳。心理学会では、これ以外にも、「信仰の実験鎖談」（明治三六年一〇月）、「ミスチシズム」（明治三七年四月）、「信仰の定義」（明治三七年一二月）、「宗教の發達に及せる智的及論理的要素」（明治四〇年五月）といった發表を行った。

前田不二三は坪井正五郎の弟子で人類学者。心理学会では、「表出の研究及び表出現象の説明」（明治三七年一〇月）、「芸術的製作に伴ふ精神作用」（明治四一年一月）といった發表を行った。

福来友吉（明治二「一八六九」年～昭和二七「一九五二」年）は、東京帝国大学を明治三二「一八九九」年に卒業し、母校の助教授となった心理学者。ウィリアム・ジェイムズを中心に講義し、催眠、透視の研究を行って超心理学を開拓した。このとき三五歳。心理学会では、「精神活動の顕在的部分と潜在的部分」（明治三四年四月）、「欲望の目的と衝突」（明治三四年一〇月）、「催眠の心理説」（明治三六年四月）、「人格変換に就いて」（明治三七年五月）、「（不明）」（明治三八年一月）、「五九

三」プリンスの人格変換に就いて」（明治四〇年三月）、「ヒペルムネジア」（明治四一年一月）、「人格に就いて」（明治四一年九月）、「透視の実験報告」（明治四三年四月）、「自動現象の実験報告」（明治四三年一二月）と、数多くの發表を行った。

紀平正美（明治七「一八七四」年～昭和二四「一九四九」年）は、哲学者。東京帝国大学卒業後、学習院大学教授となったヘーゲル研究の先駆者である。このとき三〇歳であった。心理学会では、「思考表象感覺概念等に就きヘーゲルのエンチクロペデーの一節」（明治三八年三月）、「歸納法に就いて」（明治四〇年四月）、「ロイス氏の「自意識変態現象に就て」」（明治四一年一〇月）といった發表を行った。

蠣瀬彦蔵は、「心理的用語の取扱に就て」（明治三八年四月）、「米國に於ける最近心理学的題目の二三」（明治四四年四月）といった發表を行った。

明治三八年四月発行の『哲学雑誌』第二一八号には、

「○心理学会 去る三月十八日午後六時より大学構内集会所に於て催されたる同例会席上に於て、『思考、感覺的の者 (Das Sinliche)、表象の區別に就きヘーゲルのエンチクロペデーの一節』てふ表題にて、略ぼ左の意味にて、文学士紀平正美君の講演ありき。……当日の聴講者は松本、高田、廣池、菊地。福来、蠣瀬及び当日新たに入会

せられたる淀野の七氏なり (H・K)」

とある。新たな名前が見える。高田は高田儀光(明治八「一八七五」年、昭和四八「一九七三」年)で、駒澤大学名誉教授、仏教学者。このとき、二九歳であった。心理学会では、「座禅に就いて」(明治三六年三月)、「座禅の発達に就いて」(明治三八年一二月)といった発表を行った。淀野については不明である。

明治三八年五月発行の『哲学雑誌』第二一九号には、

「○心理学会 四月十五日午後七時より例会を大学の集会所に開き、蠣瀬文学士の「心理的用語の取扱に就て」と題する講演あり、終りて質問雑談等に移りて九時過る頃散会せり。その講演は本号に記載せるもの是なり、当日出席者は蠣瀬氏の外に、福来、紀平、大島、木山、淀野、廣池の諸氏にて凡て七名なりき」

とある。大島正徳(明治一三「一八八〇」年、昭和二二「一九四七」年)は、東京帝国大学講師、助教を経て教授となった。哲学者、教育家。このとき二四歳。心理学会では、「同化力としての情意」(明治四〇年二月)という発表を行った。

木山については不明である。

明治三八年七月発行の『哲学雑誌』第二二一号には、

「◎心理学会例会／六月十七日例場に開く。当日の講演は廣池千九郎氏の「支那文学に於ける心理的概念」にして其の全文は即ち本誌別に所載の論文是也。講了後二三質問及び弁明ありて雑談に移る、来会の一人松本博士曰く此の種の研究は未だ見ざる新方面研究にして殊に昨今欧米心理学者の務めて知らんと欲する所なれば頗る価値ある研究題目也と由て請ふて其の全文を本誌に掲ぐることにせり」

と、松本博士の高い評価を得たことが記されている。この松本は、松本亦太郎のことであり、「明治の元良勇次郎、大正の松本亦太郎は確かに心理学の実力第一人者であった」といわれる人である。³⁴

廣池の報告の目次を作成し、出だしの部分を示しておくことにしよう。

支那文学に於ける心理的概念

目次

第一 緒言

第二 予講

第三 本論

(一) 序論／(二) 心／(三) 精神と魂魄／(四) 情と性、付感の字／(五) 意志／(六) 志気と理気／(七) 智／(八) 心身の關係に関する當時の觀念

「第二 予講

私は東洋法制史の研究を専門として居るもので御座りますれど、年来哲学的方面に不_レ淺興味を有して居るのです、何故に哲学的方面に興味を有するかと云へば、法制史は、法理学の一部分で、法理学は、即ち法律の哲学的研究より生ぜし学科であるから、自然、法制史の研究者は、此方面に興味を持つやうになる次第です、而して、其所謂興味なるものは、消極的のものでなくて、誠に、必要なる事から呼び起されて来たものです。即ち、完全に、古今の法制を研究するには、単に書史上に現はれたる法制の形式を研究するに止まらず、必ずや、其実質をも研究せざるべからず、随つて、各時代の英雄、豪傑、并に学者の思想、及び一般人民の思想を探究せざるべからざるものであるから、是等の研究を完うするには、非常に哲学的方面の知識を要する次第で、殊に、心理学にありては、心理学者の所謂人類心理学 (Folk psychology) といふもの、如きは、甚だ必要の事であるやうに思ふのです。

第三 本論

(一) 序説

支那古代に於ける哲学的方面、並に倫理的方面的研究は、諸先輩の力にて、段々進歩をして来_{マシ}ましたが、心理学の事は、一向見当らぬ様です。夫故に、今晚伺つて見た問題は、沢山あれど、先づ、今晚は、心といふ事と、精神、魂魄といふ事と、情と性といふ事と、意志、志気、理気などいふ事と、智といふ事に就いて、支那古代の思想にては、之を如何に考へて居つたかといふ事に就いて、愚見を陳述し、以て諸君の高教を仰がむと欲するのです、即ち、これらは、皆彼此相関聯して居るため、其一を研究するには他を悉く研究せねばならぬからであるのです。⁽³⁵⁾

廣池の心理学に対する関心は、東洋法制史研究に由来するものであったことが明確に語られている。東洋法制史研究における心理学的研究は「一向見当らぬ様です」と廣池は述べているが、心理学においてもこのような研究は「未だ見ざる新方面研究」であったことは松本亦太郎のコメントからわかる。学問間の新たな領域が切り拓かれつつある様子を窺うことができる。

引用文中に「心理学者の所謂人類心理学 (Folk psychology)」とある Folk psychology は、『論文』では「民俗心理

学」と訳され、大きく取り上げられ、ヴントの『民俗心理学 (Völkerpsychologie)』、『民俗心理学概論 (Elemente der Völkerpsychologie)』、『民俗心理学の諸問題 (Probleme der Völkerpsychologie)』から九箇所も引用が行われることになった。民俗心理学に対する関心は二三年間も持続し、道徳の科学的研究において重要な位置を占めることとなったのである。

七 元良没後の日本の心理学の展開

元良が大正元年一月二日に逝去し、昭和三年一月二五日に廣池の『論文』が出版される間に、日本の心理学研究は大きく変貌した。

「第一次大戦（一九一四）〔大正三〕年七月～一九一八〔大正七〕年一月）が終わる頃になると、ヴント以外のドイツ心理学の直接の影響が、少しずつわが国にも現れ始めた。ブレンターノ (Brentano, F.) の作用心理学、ディルタイ (Dilthey, W.) の了解心理学、ヴェルツブルグ学派の思考心理学などが次々と紹介されたが、とりわけベルリン学派のケーラー (Köhler, W.)、ウェルトハイマー (Wertheimer, M.)、レヴィン (Lewin, K.) などに代表されるゲシュタルト心理学への傾斜が目立った。／こうした

現象の背後には、すでに流行となりつつあったあまりに実用主義的なアメリカ心理学への反発があったようである。当時のドイツ心理学にはアメリカ心理学にない新鮮な視点や挑戦的な議論があつて、それが多くの若い心理学者を引き付けたのであろう。³⁶⁾

「精神分析の紹介は「第二次世界大」戦前から行われていたが、学界ではタブー視される傾向があつて、心理学として公認されたのはやはり戦後になってからである。³⁷⁾

八 むすび

廣池の実験心理学に対する取り組みは、当初、「今後法律学を科学的に造り上げるには、自然科学の力に待たねば為らぬ事が多い」という穂積陳重博士の言葉に促されたものであったかもしれないが、廣池は、その言葉にある「法律学」を「道徳学」に換え、自然諸科学の知見を援用して、穂積の予言的洞察を実現したのである。また、『論文』第四章の実験心理学的内容に関し、廣池は、いかなる素養をもって執筆したのかという問いを掲げておいたが、これに対しても元良勇次郎博士について実験心理学の指導を受け、「心理学会」に参加するだけでなく、月例研究会において東洋法制史学と心理学の学際領域を切り拓く斬新な発表を行っていたことが明らかとなった。

注

(1) 『論文1』、五六ページ。

(2) 『論文2』、第四章「人類階級の後天的原因」の構成は次のようである。

第一項 心理学の起原及びその研究法の沿革

第二項 比較心理学・動物心理学・児童心理学・異常心理学・

犯罪心理学・社会心理学・民族心理学及び団体心理学

第三項 行動より見たる動物及び人間の心の段階

第四項 唯心論・唯物論及び心身相制説へもしくは因果説より

精神物理的並行説に至る

第五項 精神物理的並行説及び両面説の實質ならびにこれに対する反対説

第六項 生理学的心理学及び実験心理学

第七項 心身の相互作用に関する実験の結果

第八項 中国・インド及び日本における精神作用と肉体との関係についての経験説

第九項 ジェイムズ・ランゲ説

第十項 精神作用の物質支配

第十一項 人類階級の後天的原因の科学的証明

(3) 『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』、一七ページ、

『復刻版 廣池千九郎モラロジー選集三』、四二九ページ。

(4) 参考のために、坪井正五郎博士の略年譜を示しておく。

一八六九(文久三)年 一月五日、江戸領国の矢ノ倉で誕生。

一八七六(明治九)年 大学予備門に入学。

一八八〇(明治一三)年 大学予備門を卒業、帝国大学理科大

学生物学科に入学。

一八八四(明治一七)年 一〇月、人類学会を創立。

一八八六(明治一九)年 二三歳、人類学会報告第一号を創

刊。帝国大学理科大学生物学科を卒業大学院に進む。

一八八八(明治二一)年 理科大学助手となる。

一八八九(明治二二)年 ロンドンに留学し人類学を究める。

イギリス人類学会会員に推挙される。

一八九二(明治二五)年 二九歳、帰国と同時に理科大学教授

となり、新設の人類学講座を担当。

人類学会会長に就任。

一九一三(大正二)年 五月二六日、ロシアの首都ペテルブ

ルクで客死。享年五〇歳。

http://kotobank.jp/word/%E5%9D%AA%E4%BA%95%

E6%AD%A3%E4%BA%94%E9%83%8Eを参照して作製。

(5) 文部科学省のホームページにある「帝国大学の発足と拡充」に

「4. 4. http://www.next.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/

detail/1317632.htm

(6) 荻阪直行編著『実験心理学の誕生と展開―実験機器と史料から

たどる日本心理学史―』京都大学学術出版会、二〇〇〇年、四七ペ

ージ。

(7) 元良勇次郎の経歴は、佐藤達哉『日本における心理学の受容と

展開』北大路書房、五六―五七ページ、佐藤達哉『日本における心

理学の受容と展開』北大路書房、六五二―六五三ページ、佐藤達

- 哉・溝口元『通史 日本の心理学』北大路書房、五五九—五六六ページを参照して作成した。
- (8) 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』、六九ページ。
- (9) 高橋穰「元良勇次郎」、監修・大山正、編集主幹・大泉溥「元良勇次郎著作集 別巻1 元良勇次郎関係資料」クレス出版、二〇一三年、一七ページ。高橋穰は元良の次女静の夫であり、物理学者の高橋秀俊の父。
- (10) 現在の東京大学は、東京大学（一八七七〔明治一〇〕）、帝国大学（一八八六〔明治一九〕）、東京帝国大学（一八九七〔明治三〇〕）、再び東京大学（一九四七〔昭和二三〕）と、四回改称している（梅本堯夫・大山正編著『心理学史への招待—現代心理学の背景—』サイエンス社、一九九四年、二九八ページ）。
- (11) 新渡戸稲造は九歳で叔父の太田時敏の養子になり太田稲造となったが、明治二十二年に兄二人が死亡したため、新渡戸姓に戻った。
- (12) 「帝国大学の前身は学部制の東京大学だったが、明治十九年に公布された帝国大学令により東京大学は改称されて帝国大学になった。これに伴って学部制は廃止され、新たに分科大学制が導入されたが、この制度が維持されたのは大正八年二月までで、それから先はかつての学部制にもどり、そのまま現在に至っている。／帝国大学から発足した当初は法科、医科、工科、文科、それに理科の五つの分科大学で構成されていたが、少し後に農科大学が加わった。」
- 〔高木貞治「近代日本数学の父」岩波新書、二〇一〇年、六一ページ〕
- (13) 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』、一〇九ページ。
- (14) 高橋穰「元良勇次郎」、監修・大山正、編集主幹・大泉溥「元良勇次郎著作集 別巻1 元良勇次郎関係資料」、一八ページ。
- (15) 『元良勇次郎著作集』刊行委員会、監修・大山正、編集主幹・大泉溥「元良勇次郎著作集 別巻1 元良勇次郎関係資料」、五八—八ページ。
- (16) 荻阪直行編著『実験心理学の誕生と展開—実験機器と史料からたどる日本心理学史—』、六九ページ。
- (17) 荻阪直行編著、前掲書、八八ページ。引用文中の文献は、「松本亦太郎（一九一三）追憶三十年、心理研究、三、三四六—三五九。」
- (18) 荻阪直行編著、前掲書、八九ページ。
- (19) 荻阪直行編著、前掲書、九ページ。
- (20) 荻阪直行編著、前掲書、二〇ページ。
- (21) 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』、一五ページ。引用文中の文献は「[Hall, G. S., 1912, *Founders of modern psychology*, Appleton.]」
- (22) 荻阪直行編著、前掲書、三〇—三一ページ。引用文中の文献は、「長瀬鳳輔（一九一三）ジョンズ・ホプキンス期 故元良博士追悼学術講演会（編） 元良博士と現代の心理学（一四〇—一四五）、弘道館。」
- (23) 「廣池千九郎関係資料」。
- (24) 「廣池千九郎関係資料」。
- (25) 「廣池千九郎関係資料」。
- (26) 「廣池千九郎関係資料」。
- (27) 「廣池千九郎関係資料」。
- 〔大和丹波市町／廣池千九郎様
東京都牛込神楽町二ノ二〇／幡瀬彦藏

御状拝誦仕候、御上京中ハ折悪しく行き違ニて御面会ヲ得ざりしは遺憾ニ候。扱て御質問に就き、左の如く御答申上候。／ウスター其他多の北米諸都市に於て、毎年市民の投票にて多数決に従ひ、禁酒を勵行すること御質問の通りに相違無之候。ウスター市に小生滞在の当初の年は非禁酒にて、我邦の如く飲酒行はれおり候故別段注意を払はざりしも、其の翌年及び翌々年は引続き禁酒党優勢の結果として禁酒勵行せられ、其の為め酒店は大打撃を受け、或は閉店し或は他市に移転し、或は職業換を為したるもの少からざるを見受候。無論料理店又は宴会の席等にて禁酒故、氷水を代用し、併も人々は愉快に談笑するを見て、日本流の宴会に慣れたる小生等には奇異に感ぜられ候。禁酒の投票は毎年一回市長の改選の投票と同時に行はれ、其の際は市民は大擾にて、投票の結果を鶴首待受候。其の翌日の新聞紙には、米國諸市に於ける禁酒非禁酒の結果を掲げ、昨年の禁酒市は本年は非禁酒市となる等、色々の変動を示し候。／最も此等の制度は大抵小市邑に行はれ、紐育、ホストン、シカゴ等の大都市には全く之れ無く、常に非禁酒に有之候。禁酒の年の市の人民にして酒を飲まんとするには、最も近き非禁酒の年の市邑（通常四、五哩又ハ七、八哩位）に出掛るか、懇意の医師に請ふて証明書を貰、薬種店にて一瓶を購ふか、又は一箱（例はビールならは一ダース）を他市より輸入する等にて其の目的を遂ぐるを得、此等は厳格には不正なるも、公然の秘密として黙許せられ居り候。小生此の訳を或る人に尋候処、禁酒の目的は下等労働者が其の賃金を飲酒に浪費し、家族を扶助さす為めに其の惨憺たる生活を持来すことを防止せんとするにあれば、中流以上の余裕ある人々が、他市より酒料を輸入し、又は

薬舗にて購ひ、家内にて使用する等は妨げ無しとのこと答候。

／小生滞在の第四年目には、非禁酒の投票多数の結果によりて、非禁酒行はれ、閉鎖したる酒舗は再び開業し、他行したる者は帰市し、酒店は再び労働者の群かる所となり候。兎に角吾人の感心する所は、何人も市の決議を遵奉することに有之候。

米國の多くの市邑は自治制頗る発達し、市民は自己の法律によりて自己を支配し居る故、我邦の如く官民の軋轢等のことは過去の事に属し、今や資本家と労働者との争闘が問題と相成居り候。／蠣瀬彦蔵／廣池千九郎様／大正三年一月二十五日

(28) 『廣池千九郎日記2』、三〇二ページ。

(29) 『廣池千九郎日記3』、一一〇、一一一ページ。

(30) 廣池富『父 廣池千九郎』、三八四ページ。また、引用文中にある広瀬淡窓は、天明二年四月一日〔一七八二年五月二日〕、安政三年一月一日〔一八五六年一月二八日〕は、江戸時代の儒学者で、教育者、漢詩人でもあった。豊後国日田の人である。

(31) 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』、四七ページ。

(32) 心理学会での発表は、監修・大山正、編集主幹・大泉溥『元良勇次郎著作集 別巻1 元良勇次郎関係資料』、一一一―一一五ページによった。

(33) 苧阪直行編著、前掲書、六一ページ。

(34) 参考のため、松本亦太郎の略歴を掲げておく。

一八六五〔慶応元〕年一月三日 上野国高崎（現・群馬県高

崎市）に生まれる。

*

元良勇次郎と共に、同志社英学校卒業の創期の学生。東京帝国大学文学部哲

学科卒業。ライプツィヒ大学、イェール大学に留学。

*

一九〇一〔明治三四〕年 東京帝国大学心理学講師を嘱託され、実験心理学の講義に当たる。

一九〇六〔明治三九〕年 京都帝国大学教授となり心理学講座の新設に当たる。この間、京都市立絵画専門学校校長。

一九一三〔大正二〕年 東京帝国大学教授となり心理学、倫理学を担当、心理学講座を新設する。

一九二六〔大正一五／昭和元〕年 定年退官。

一九二七〔昭和二〕年 日本心理学会を創設、初代会長に就任。日本における実験心理学の基礎を築いた。

一九四三年（昭和一八年）二月二十四日 没。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%9C%A%E4%A6%E5%A4%AA%E9%83%8E>を参照して作製。

(35) 『哲学雑誌』第二二二号、八一九ページ。

(36) 梅本堯夫・大山正編著『心理学史への招待―現代心理学の背景―』サイエンス社、一九九四年、三〇四ページ。引用に際し、第一次大戦の期間を補い、「十三章参照」という記述を省いた。

(37) 梅本堯夫・大山正編著、前掲書、三〇八ページ。

* 本稿は、二〇一二年三月七日、道徳科学研究センター「現代倫理道徳研究会」と、二〇一三年三月一〇日、「廣池千九郎記念館講話」

の発表をもとに執筆したものである。また、本稿出版に際し、草稿を読んで貴重なコメントを述べていただいた、井出元廣池千九郎記念館館長に感謝申し上げます。